

大阪

あんなとこ
こんなとこ

『土佐堀・江戸堀・京町堀』

水の都、大阪。かつては沢山の堀川が流れていたその名残で堀と名の付く地名が多くあります。特に西区では、土佐堀、江戸堀、京町堀、立売堀、長堀、堀江と北から南にかけて堀と名の付く地名が続きます。今回はそのうちの土佐堀、江戸堀、京町堀について調べてみました。

土佐堀

西区土佐堀一帯は、豊臣秀吉が大坂城を本拠地と定めた頃、土佐国（現在の高知県）から来た商人が多く住んだことから「土佐座」と呼ばれていました。その為、堀川の名を土佐堀川と名付けたと伝えられています。土佐堀の地名は、町域が大川の分流である土佐堀川左岸に沿って位置することに由来しているそうです。

江戸堀

江戸堀という地名は、土佐堀川の南側を並行して流れていた江戸川沿いに町域が位置していた事に由来します。堀川の名称については、はっきりとした記述を見つける事が出来ませんが、徳川幕府の統治下に入り、最初に開削した掘り割りだからというのが有力な説といわれています。江戸堀川は水質浄化の為昭和11年（1936）頃、川の起点部分に可動堰が設けられましたが、昭和30年（1955）には埋め立てられました。

京町堀

京町堀は、大坂冬の陣・夏の陣の後、大坂城主・松平忠明により人口が少なくなつた大坂の町に再び人を集める為の政策がとられました。その呼びかけに伏見京町から移住してきた人々が住居した町域であることに由来します。その為この町を流れる京町堀川は、当初伏見堀川とも呼ばれていました。江戸時代、川の北岸には雑喉場ざごばと呼ばれる魚市場があり、諸国の漁船の出入りも多くあつたそうです。京町堀川もまた昭和30年に埋め立てられ今はありません。

これらの堀川が西区に集中しているのは、大阪湾と船場



現在の京町堀付近(四つ橋筋)

を結ぶ中間点に位置する事に起因するそうです。この一帯は、低湿地帯だった為、堀川の開削で出来た土が町づくりに役立ったそうです。また、堀川の掘削は海運の上でも大変有益でした。江戸時代、この地域は堀川岸沿いに各藩の蔵屋敷が建ち並び、諸国の物産を積んだ船の出入りで大層賑わったといえます。

掲載の記事・写真・イラスト等の全てのコンテンツ無断複写、転載を禁じます。

(株) ファッションビジネス・御堂筋新聞